

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

（おおくぼしんご）
大久保慎吾は中学入学時からバスケットボール部で活動していたが、ひざの痛みにより練習が困難になった。慎吾は、医者や親にすすめられ、一年生の三月末にバスケットボール部を退部した。そのことが原因で、二年生に進級してからも落着かない気持ちが続いていた。ある日、一年生のときの担任だった辻井先生から声をかけられた。）

「退部してから、バスケット部の仲間には会った？」

「いや、なんとなく会いづらくて……。」

「そういわずに、たまには顔を見せてやったら。きょうの六時間目、三年生は臨時の学年集会だったんだけど、それがまだ長引いてるみたいだから、いまなら先輩と顔を合わせずに部の仲間と話せるよ。」

そう告げる辻井先生の顔には、滅多に見せないやさしい笑みが浮かんでいた。けれどぼくが驚いていると、すぐにその笑顔を引っこめて、「それじゃあ。」と職員室に入っていくてしまう。

職員室の戸が閉められたあとで、ぼくはバスケット部のみんなが練習をしている体育館のほうを振りかえった。

体育館の床で、バスケットボールが弾む音が聞こえてくる。部活を辞めてまだ半月ちょっとしかたっていないのに、ぼくにはその音がやけに懐かしく聞こえた。

放課後の体育館を訪れるのは、退部のあいさつをしにいったとき以来だった。まだバスケット部のみんなと話をする決心がつかなくて、ぼくはこっそり体育館の中をのぞいてみた。

体育館の中では、バスケット部がすでに練習を始めていた。^{注1} 雅人も、^{注2} バリーも、^{注3} もっさんもいる。残りの部員は全員新入生だ。すごい、八人もいるじゃないか。これなら三年生が引退しても、部員不足に悩むことはなさそうだ。

雅人がおもしろいことをいったのか、一年生たちが笑いだした。雅人、愉快ないい先輩をしてるみたいだな。ぼくが退部する前は、新入部員の指導なんてめんどくさいとかいってたのに。

先輩らしく振る舞っている仲間の姿をながめているうちに、ぼくはたまらなく寂しくなった。もうこの放課後の体育館に、ぼくの居場所はない。

様子を見にきたりなんてしなければよかった。その後悔しながら、

「ぼくはその場を立ち去ろうとした。ところがそのとき、姿の見えなかったもうひとりの二年生部員の^{注4} 満が、ちょうど体育館にやってきた。

用事があって遅れたんだろうか。満はまだ制服姿で、ぼくを見て驚いた表情を浮かべていた。

「やっぱり慎吾か。こんなところでぞいてないで、中に入ればいいのに。」

「いつ、いや、練習の邪魔をしちゃ悪いと思って……。」

「そんな気を遣うことないだろ。おい、慎吾がきてるぞ！」

満が体育館の中に向かって声をかけると、すぐに雅人が飛んできた。

もっさんとバリーもそのあとから駆けてくる。

「慎吾、この薄情者！ たまには顔見せろよなあ。寂しいだろ！」

「ごめん。けど、退部したのに練習に顔を出すのは気が引けて……。」

「水くさいこというなよ。とにかく中入れって。」

遠慮する暇もなく、ぼくは体育館の中に連れこまれてしまった。

体育館のステージにみんなと輪になつて座ったものの、どんな話をしたらいいかわからず、ぼくはミニゲームをしている一年生たちを見ていった。

「新人部員、たくさん入りそうでよかったね。」

それからぼくたちは自分のクラスのことや最近のできごとについて話をした。ぼくがまだバスケット部にいたころの、練習前や休憩時間とおなじように。

なのに、²ぼくは仲間たちとのあいだに、これまではなかった距離を感じていた。それはきつと、ぼくがみんなに隠していることがあるから。そしてみんながぼくに気を遣ってくれているからだ。その証拠に、ぼくの脚や退部のことには、だれも触れようとはしない。

しばらく話したところで、ふいに会話が途切れた。一年生がスリーポイントシュートを決めて歓声をあげた。ぼくがそちに注目するふりをして、気まずさをまぎらわせていると、満が「慎吾。」と話しかけてきた。不安をこらえるような、硬い表情で。

「おまえの脚のことを聞いたときから、謝らないとずっと思ってたんだ。成長痛だろうなんて適当なことをいって、ほんとうに悪かった。あ

のときすぐに病院に行くようにすすめてれば、部を辞めなくてすんだかもしれないのに……。」

「えっ、そんなの謝ることないよ。ぼくだって、自分の脚が退部しなきゃいけないほどひどい状態になつてるなんて思ってもいなかったんだから。」慌ててそういういかえしても、満の顔は晴れなかった。満だけじゃなくて、ほかのみんなもおなじように沈んだ顔をしていた。

バリーがおずおずとぼくにいった。

「けどよお、慎吾、最近ずっとおれらのことを避けてたろ。だからやっぱそのことで怒ってんじゃないかと思つてよお。」

「誤解だよ！ ぼくがみんなと顔を合わせづらかったのは、ただ、バスケット部を辞めたことがうしろめたかったからなんだ。」

口にした瞬間に、いつてしまった、と思つた。うろたえているぼくに、バリーが首を傾げて聞きかえしてきた。

「なんでだよ。退部は脚のせいなんだからしょうがないだろ。うしろめたさなんて感じる必要ないじゃん。」

ほんとうのことを、正直に話さなくちゃいけない。たとえみんなに軽蔑されたとしても。そうしなければ、きつとこれからもみんなに、ぼくのことと責任を感じさせてしまう。

仲間たちの視線から逃れてうつむくと、ぼくはおそろおそろそのことを明かした。

「たしかに、脚のせいなんだけどさ。親とか医者に退部をすすめられた

とき、ぼくははっきり嫌だつていかなかったんだ。続けようとしていれば、続けられたかもしれないのに。だからもしかするとぼくは、心の底でバスケット部を辞めたがつてたのかもしれないって、そう思ってるんだよ。いくら練習してもみんなみたいにくまくなれないから、それがつらくて部活から逃げたんじゃないか、つて……。」

言葉を終えたあとも、ぼくはみんなの反応が怖くてうつむいたままだった。ぼくがびくびくしながら沈黙に耐えていると、満が最初に口を開いた。「慎吾はそういうことはしないだろう。」

それはまるで、ぼくがなにかおかしいことをいつたかのような口調だった。驚いて顔を上げると、満は明らかに戸惑った表情を浮かべていた。

雅人が「だよな。」と相槌^{あいづち}を打ってぼくの顔を見た。

「おまえ、本気でそんなこと気に病んでたのかよ。おまえみたいに真面目で練習熱心なやつが、まだ頑張れるのに怪我^{けが}のせいにしてあきらめたりするわけないだろ。」

バリーともっさんもしきりにうなずいていた。その反応を目にしたとたん、胸の底から熱いものがこみあげてきた。

正直、ぼくはみんなのことを疑っていた。あいつは怪我を理由にしてバスケット部から逃げた。そう思われているんじゃないかと想像して怖かった。けど、そんなことはなかったんだ。ぼくはずっと自分の本心を疑い続けていたのに、みんなはいまでもぼくのことを信頼してくれていたんだ。

³ ありがたい、とぼくは心からみんなに感謝した。なにいつてんだよ、

と雅人が^{注5}茶化すようにぼくの肩を揺さぶってくる。

「……もつとみんなとバスケット部をしたかったな。」

みんなの顔を見ていたら泣いてしまいそうで、ぼくはステージの床を見つめてつぶやいた。退部から半月以上がたつてようやく、⁴ぼくは自分のほんとうの気持ちに気がついた。

(如月 かずさ「給食アンサンブル2」より)

注1〜注4 雅人・バリー・もっさん・満…二年生のバスケット部員。

注5 茶化す…冗談のようにしてごまかす。

問1 「¹ぼくはその場を立ち去ろうとした。」とあるが、慎吾がそのよ

うにしたのはなぜか。説明として最も適当なものを、次のア～オの中
から一つ選びなさい。

ア 体育館の中からは二年生の部員の声だけでなく何人もの一年生た
ちの声がしたので、今日は訪問を遠慮しようと思ったから。

イ 体育館の中をのぞくと、自分の仲間だった二年生の部員と一年生
たちが楽しそうにしていたため、入りにくさを感じたから。

ウ 体育館の中から聞こえる二年生の部員と一年生たちの笑い声が、
バスケット部を辞めた自分を笑っているように感じられたから。

エ 体育館にいる二年生の部員みんなと話したいと思っていたが、満
の姿がなく、部員全員がいるときにまた来ようと思ったから。

オ 体育館に入ったものの、自分は雅人のように一年生たちの世話を
明るくこなすことはできないし、めんどろだとも思ったから。

問2 「²ぼくは仲間たちとのあいだに、これまではなかった距離を

感じていた。」とあるが、その理由を次のように説明するとき、

I、II にあてはまる内容について、あとの(1)、(2)
の問いに答えなさい。

慎吾が仲間たちとのあいだに距離を感じたのは、バスケット部を
辞めたことについて I を感じており、それを感じてい
る理由を仲間たちに言い出せずに隠しているからである。一方、
もう一つの要因に、仲間たちの思いも挙げられる。今まで慎吾
が自分たちを避けていたのは II からだと、仲間たちは
思い込んでいる。このことも、慎吾に距離を感じさせたのである。

(1) I にあてはまる最も適当な言葉を、本文中から六字で

そのまま書き抜きなさい。

(2) II にあてはまる内容を、三十字以内で書きなさい。

問3

「³ありがとう、とぼくは心からみんなに感謝した。」とあるが、慎吾がなぜ感謝したのかを次のように説明するとき、に

あてはまる内容を、**六十五字以内**で書きなさい。

慎吾は自分の本心を疑っていたが、自分の話に対するバスケット部の仲間の言葉や反応から、ことに気づいたから。

問4

「⁴ぼくは自分のほんとうの気持ちに気がついた。」とあるが、この部分での慎吾の心情についての説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア 自分はバスケット部を辞めたほんとうの理由を仲間に伝えたかったのだと気づき、ずっと感じていた落ち着かない気持ちが消えつつある。

イ 自分は仲間と話ができなくて寂しかったのだと気づき、ずっと感じていた落ち着かない気持ちを解消するきっかけをつかんでいる。

ウ 自分は仲間と一緒にバスケットを続けたのだと気づき、ずっと感じていた落ち着かない気持ちを解消するきっかけをつかんでいる。

エ 自分は仲間から真面目で練習熱心なやつだと思われたかったのだと気づき、ずっと感じていた落ち着かない気持ちが強まっている。

オ 自分は自分の正直な思いを仲間にちゃんとわかってほしかったのだと気づき、ずっと感じていた落ち着かない気持ちが強まっている。

問5

本文の構成・表現についての説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア 文章全体を通して比喩表現が効果的に用いられており、登場人物それぞれの思いや取った行動の違いが鮮やかに印象づけられている。

イ 回想的な場面が途中で挟まれることで、この日の出来事からだけではわからない主人公の内面の変化の理由が詳しく明かされている。

ウ 登場人物それぞれの考えが第三者の視点から客観的に描かれ、互いの気持ちのすれちがいが解消していく様子が明瞭に語られている。

エ 主人公の気持ちの変化の様子が直接的に表現されることは少ないが、美しい自然の描写に反映させて間接的に描き出されている。

オ 会話と主人公の内面が交互に描写されることで、主人公の心情が他者の言葉によって変化していく様子が丁寧に表現されている。

問 1 (イ)

問 2 (1) うしろめたさ

(2) (例) 脚のことで適當なことを言った自分たちに
慎吾が怒っている

問 3 (例) 怪我を理由にしてバスケット部から逃げるような
ことはしないだろうと思ってくれるほど、バスケット
部の仲間たちが自分のことを信頼してくれていた

問 4 (ウ)

問 5 (オ)

〈備考〉 問 2(2) 同様の趣旨であればよい。

問 3 同様の趣旨であればよい。

【解説】

問 1

ポイント

傍線部直前の「もうこの放課後の体育館に、ぼくの居場所はない」という部分に注目する。このように感じたきっかけは、雅人が一年生相手に「愉快ないい先輩をしてる」様子を見たことである。自分が在籍していたころの雅人は「新入部員の指導なんてめんどくさい」と言っていたにもかかわらず、自分の知らないうちに先輩として新入部員との良い関係を築いている様子を見て、この中に自分が入り込む余地などないように感じて、その場を立ち去ろうとしたのである。したがって、イが適切。

問 2

(1) 慎吾が、バスケット部を辞めたことについて、仲間たちに対してどのような思いを抱いていたのかを捉える。これよりあとの慎吾と仲間たちの会話で、慎吾は「ぼくがみんなと顔を合わせづらかったのは、ただ、バスケット部を辞めたことがうしろめたかったからなんだ」と話していることから、うしろめたい思いを感じていたことがわかる。このあとのバリーの「うしろめたさなんて感じる必要ないじゃん」という会話から、「うしろめたさ」という言葉を書き抜けばよい。(2) 仲間たちが、慎吾がなぜ自分たちを避けていると考えていたのかを捉える。これよりあとで、満は、「不安をこらえるような、硬い表情で」慎吾に話しかけ、慎吾の脚について、「成長痛だろうなんて適当なことをいって、ほんとうに悪かった」と謝っている。これに対して慎吾は「そんなの謝ることないよ」と言うが、「ほかのみんなもおなじように沈んだ顔」をしており、バリーは「やっぱそのことで怒ってんじゃないかと思ってよお」と言っている。つまり、仲間たちは、慎吾が脚を痛めたときに適当なことを言ってしまったことを後悔しており、そのことを慎吾が怒っているのだろうと思っていたことが読み取れる。

問 3 直前で描かれた「ぼく」の心情を正しく読み取る。「ぼく」は、みんなが自分のことを「あいつは怪我を理由にしてバスケット部から逃げた」と思っているのではないかと疑い、怖いと感じていた。ところが、バスケット部を辞めた理由について正直に告白したところ、「慎吾はそういうことはしないだろう」と満に言われ、雅人からも「おまえみたいに真面目で練習熱心なやつが、まだ頑張れるのに怪我のせいであきらめたりするわけないだろ」と言われ、「みんなはいまでもぼくのことを信頼してくれていたんだ」とわかり、「ありがとう」と感謝したのである。

問 4 直前の「……もつとみんなとバスケットをしたかったな。」という表現から「ぼく」の思いを読み取る。

問 5 本文が「ぼく」の視点で描かれていることに注目する。そこで描かれている主人公である「ぼく」の心情が、バスケット部の仲間との会話を通して変化していく様子が表現されている。したがって、才が適切。